

社会福祉哲学に関する一考察

横山 穰

目次

1. はじめに
2. 生きる意味ではなく、生きている経験
3. 社会福祉の価値—価値観の視点から—
4. 社会福祉実践における価値
5. 結びとして

1. はじめに

社会福祉哲学を正面切って論じることは決して容易なことではない。哲学とは何かが明確でないと論じることすらはばかれる。しかし、哲学論を展開すること自体が本論文の目的ではないことから、最小限の範囲に止めておくことにする。哲学とは、広辞苑(第5版)によれば、「①古代ギリシアでは学問一般を意味し、近代における諸科学の分化・独立によって、新カント派・論理実証主義・現象学など諸科学の基礎づけをめざす学問、生の哲学・実証主義など世界・人生の根本原理を追求する学問となる。認識論・倫理学・存在論などを部門として含む。②俗に、経験などから築きあげた人生観・世界観。また全体を貫く基本的な考え方⁽¹⁾」となっている。また、旺文社国語辞典によれば、「世界・人生の根本原理を研究する学問。事物究極の原理を扱う学問⁽²⁾」と記されている。

一般に哲学と言うと、「いかにして生きるか」、「人生とは何か」、「生きることの意味は何か」、「生きがいとは何か」等々、自分の生き方や人間そのものの実存を問いかけるものが真っ先に思い浮かぶ。しかし、社会福祉哲学という場合には、自分や人間一般というレベルにとどまるものではない。すなわち、援助者であるワーカ

ーはもとより、ワーカーが向き合って援助するクライアント、サービス利用者、サービス活用者(北海道介護福祉学校教員の高松登氏が提唱する)の側に立つ哲学が必要となる。

例えば、障害児者福祉の分野で多大な功績を残した糸賀一雄⁽³⁾は「この子らを世の光に」を座右の銘とした。障害児がこの世における光の存在としてこの世を明るくするというのである。これは糸賀によるところの「社会福祉哲学」と言ってもよいと思われる。また、非行少年の福祉・更生事業⁽⁴⁾において顕著な功績をあげた留岡幸助は「一路到白頭」を座右の銘とした。これは、明日のことをあれこれ考えて思い煩うのはやめて、今日一日を精一杯生きて、白髪頭になるまで一筋の道を歩み続けようという意気込みと決意を表わしたものである。こうした援助者の側からの社会福祉実践の哲学は比較的理解しやすいし、多く語られる。しかし、援助を受け、ニーズや問題の当事者であるクライアントの側から見た社会福祉哲学に関してはあまり語られてこなかったし、これまで注目されてこなかったのではあるまいか。本論文ではこうした点を考慮に入れながら、社会福祉の哲学について、可能な限り新たな視点から考察を深めていきたい。⁽⁵⁾

ところで、カトリックの神父である井上洋治は、自著の『余白の旅』のなかで、遠藤周作の言葉を以下のように紹介している。

「一人の人間が他人の人生を横切る。もし横切らねばその人の人生の方向は別だったかもしれぬ。そのような形で我々は毎日生きている。そしてそれに気がつかぬ。人々が偶然とよぶこの『もし』の背後に何かがあるのではない。『もし』をひそかに作っているものがあるの

ではないか。⁽⁶⁾」

哲学とは、まさに遠藤のことばをそのまま用いるなら、「もし」の背後にある何かを探し出す営みといえるのではないだろうか。そして我々は通常、この「何か」に気づかず、ましてや「何か」の実態を明らかにしようとはしない。井上は、生きとし生けるものは、「生きとし生けるものの余白」ともいえるものの力によって生かされ存らしめられ、それぞれの場をえさしめられているのであって、それぞれの生命と役割をカ一杯生きぬくことによって、己れ自らをではなく、己れ自らをもつつむ全体を表出していくものと述べている。このことは、「余白」という一見あってもなくてもいいように思えるものが、実は人生において重要な役割を果たしていることに気づかされる。社会福祉も同様に、我々の大多数は日常生活において意識するとなしとに拘らず、必ずなくてはならないものと認識していると言い難い。もちろん、仮に人生の途上で、何らかの障害を負う身となったり、高齢となり病気が発生したり、介護を必要とするような状況に立たされた時には、社会福祉はより身近で他人事ではなく、なくてはならないものと感じるかもしれない。しかし現実にたいいていの人は、社会福祉は自分とは無縁のものと感じ、できれば社会福祉と関係しないにこしたことはないと考えているのではなかろうか。

あえて喩えていうなら、社会福祉は我々の日常生活において余白の部分占めているように思われる。しかしながら、喩え余白であったとしても、実のところいざという時には、欠いてはならない重要な存在となりえるのである。こうしたことから、余白的な存在と見なされがちな「社会福祉」が、我々の日常生活の背後にありながらも、なくてはならない不可欠な存在といえるのではないか。社会福祉の「哲学」を根底から支える思想を模索していくためにも、ワーカーの視点からのみの社会福祉援助観にとどまることなく、クライアントの体験に基づく視点を踏まえた社会福祉援助観を見つめなおすことで、社会

福祉哲学を新たに再構築することが可能なのではないかと思う。

2. 生きる意味ではなく、生きている経験

さて、世界的に著名な神話学者であるジョーゼフ・キャンベルは『神話の力』⁽⁷⁾で、ビル・モイヤーズとの対談において、次のように語っている。⁽⁸⁾

「私はカトリック教徒として育てられました。カトリック教徒として育てられることの大きな利点のひとつは、神話を真剣に受け止め、自分の生活の中に神話を働かせ、そういうモチーフに従って生きるように教えられることです。私はキリストの降誕、地上での教え、死、復活、昇天というサイクルと季節との関係を保ちながら生きるように仕向けられました。年間に儀式や行事がたくさんあるおかげで、時間のなかで生起するあらゆる変化の底にある永遠の核というものを常に意識しないではいられませんでした。⁽⁹⁾」

キャンベルが述べていることで、「永遠の核」とは何かこそが、哲学が永遠に問い続ける命題となろう。例として、社会福祉の実践が人間個々人の人生そのものに関わりを持つと考えた場合、キャンベルが指摘したように、人間が探し求めているものは「生きる意味ではなく、生きているという経験⁽¹⁰⁾である」という論は大きな意味を持つ。そしてキャンベルによる「幸福論」というべきものとして、「純粋に物理的な次元における生命経験が、自己の最も内面的な存在ないし実体に共鳴をもたらすことによって、生きている無上の喜びを実感する⁽¹¹⁾」という指摘がある。この叙述は、社会福祉実践が単に物質的・物理的なニーズを満たすことをもって事足りるのでなく、精神的・実存的なニーズをも満たす必要があることに気づかせてくれる。つまり社会福祉実践においては、人間の全体的かつ包括的なニーズを満たすことを目標に置くべきことを認識させてくれる。

ところで、キャンベルが述べた「生きているという体験」は、井上洋治によれば、「出会い」で

あり、先に引用した「一人の人間が他人の人生を横切る。もし横切らなければその人の人生は別だったかもしれぬ。そのような形で我々は毎日生きている。そしてそれに気がつかぬ。人々が偶然とよぶこの『もし』の背後に何かがあるのではないか。『もし』をひそかに作っているものがあるのではないか。」⁽¹²⁾が相当する。

つまり、我々が日常「偶然」として捉えているものが、実は「必然」であることを体験するというのである。さらに井上は、人を生かす力は余白（絵画のキャンパス等に見られる）の存在によると述べている。つまり「何も描かれていない余白の部分が、まさに描かれている部分を、各々その場に命あらしめているのであり、その場をえさしめている」⁽¹³⁾という。そして、「生きとし生けるものは、それぞれの生命と役割を力一杯生き抜くことで、己を自らをではなく、己れ自らをもつつむ全体を表出していく」⁽¹⁴⁾とも語っている。井上はこの「余白の力」は「風（プネウマ）」ではないかとも語っている。

以上のことから、我々が通常「生命力」と認識しているものは、我々の背後にあって後押ししているものである。また、一見何も価値がないと思えるものが、実はそれなくしては全体が構成されない重要な部分であるということではないだろうか。日系一世の糸井弁子氏が、筆者の米国留学中に直接手紙のなかで語ってくれたことに、「バックボーン(Back bone)」の大切さがあった。つまり人体でいう「背骨」の重要性である。心理学用語でいえば「アイデンティティ」とでもいえるか。つまり掛け替えのない一人の人間にとって存在の根底をなす基盤であり根源でもある。さらには、その人にしかない固有の「人格」でもある。その人らしさといえ、凡庸な表現ではあるが、キリスト教理解によれば、土くれの存在でしかない人間が、神の吹きつける息によって生命が宿り、土から人間が誕生したという人間創造・起源説である。そして神が人間の名前を呼ぶ行為を通して、人間としてのアイデンティティを与えられたと理解するのである。

すなわち、人間の生命はじめ存在までもが、人間自らが努力して勝ち得たものではなく、絶対者とされる神によって与えられ創造されたという思想である。こうしたいわば創造主信仰にあっては、神の存在が人間の存在に先立っているところに、井上が「神の息吹」と呼ぶプネウマの存在を意識せずにはおれない。

話を社会福祉の哲学との関係において戻すことにするが、2001年10月17日付朝日新聞の朝刊に掲載された「天声人語」において、「センス・オブ・プロポーション(sense of proportion)」の重要性について述べていた。つまり、状況判断の際に、目先の問題だけに目を奪われるのではなく、長期的展望に立って問題の大局を判断する能力(大局観)を持つことがいかに重要であるかという指摘である。この哲学というべきか思想とでもいうべき知恵は、社会福祉実践においてもあてはまる。援助のプロセスを例にすれば、短期・中期・長期というように援助目標は時系列のなかで考える必要がある。当面の問題に関しては短期目標を設定し、危機介入の際には「今ここで」という課題中心のアプローチが要求される。しかし、現時点での対応はあくまで応急的な処置でしかなく、真の根本的な問題解決のためには中期的・長期的な展望を必要とする。これらはワーカーの側の視点に基づくものであるが、他方クライアントの側からすれば、短期目標として自らの問題解決のために、今自分は何ができるのであろうか、あるいは何をすべきなのかという問いが生じる。しかし、それと同時に、中期・長期目標として、今後自分はどうなっていくのであろうか、果たして問題は解決できるのであろうか、もし解決できなかつたらどうなるのであろうかという将来に向けての不安や心配が生じるのである。従って、ワーカーにとって重要であるセンス・オブ・プロポーションは、クライアントにおいても同様に重要なのである。ただしその違いとして、クライアントの側でセンス・オブ・プロポーションは、クライアント自身の問題解決に向けての動機づけや能

力(知的・身体的・意志的)を含めたストレングス(strength)に関する重要な構成要素と考えることができるのではないだろうか。

3. 社会福祉の価値—価値観の視点から—

嶋田啓一郎⁽¹⁵⁾は、価値 = 欲求(ニード = need)ではないと明言している。彼によれば、現代は価値観が多様化しているのではなく、欲望が多様化しているという。嶋田にとっては、価値とは数多くある欲求のなかで、欲しいものではなく、望ましいものを選びとる(Aを犠牲にしてBを選びとる)という主体的な意思決定によって生れるという。ことばを換えれば、価値とは「欲しいもの」にあるのではなく、「必要とするもの」にある。渡辺和子⁽¹⁶⁾は、ラインホルド・ニーバー⁽¹⁷⁾の祈りとして「神に対して、欲しいと願い求めているものは何ひとつ与えられなかった。しかし、必要とするものは全て与えられた⁽¹⁸⁾」を紹介しているが、この祈りは価値とは何かを考える際に重要なヒントを与えてくれている。価値とは、キリスト教的世界観に立てば、人間の努力によって勝ち取るものではなく、神の恩寵(恵み)にあずかることによって与えられることを意味する。従って、価値は神と共に歩むところに存在することになる。わかりやすく言えば、価値はキリスト教の教えである「神を愛するように、隣人を愛しなさい⁽¹⁹⁾」という命題と深く関わっている。聖書によれば、人間が先に神を愛したのではなく、神が先に人間を愛したという世界観がキリスト教にはある。つまり、神と人間という縦の関係(契約関係)と人間同士という横の関係の2つが十字架同様に交叉して、その中心に神が存在するのである。よって人間同士の交わりにおいても、神が中心にあって人と人が交わることになる。嶋田は、キリスト教社会福祉の目標の一つとして、「共同体のなかの交わり⁽²⁰⁾」の創造を掲げている。しかし、とかく人間中心の考え方(人間万能主義)がはびこる現代において、キリスト教による終末観がないがしろにされると指摘する。すなわち、人間の自己中心性に

よるところの限界告白の欠如によって様々な弊害が生れているという。その一つは科学万能主義であり、人間の自己絶対化と神の存在否定によるニヒリズム(虚無主義)の発生であるという。消費文化がもたらすモノ中心の考え方は人間性を奪うことになりかねない。言い換えればモノ中心の世界観が人間疎外の状況を生み出しているというのである。よって、人間の限界性(不完全さ)を認識し、神中心の世界観に拠って立つ「交わりのなかの共同体⁽²¹⁾」を実現することが重要であるとしている。こうした、共同体という価値意識は、共同体における人間同士の助け合いを促し、人間が他の人間や社会にとって役立つだけではなく、喜びをもたらす器となることこそが大きい意味を持つとした、マザーテレサの愛の思想に通じるものがある。マザーは、人間にとって重要なのは、他者から必要とされることであり、すなわち関心を向けられることであると述べた。そして「愛の反対は、憎しみではなく無関心である⁽²²⁾」と主張した。このマザーのことばを通して、人間の価値、人生の価値について考えると、社会福祉が目標とする幸福の実現に関連して、生きている喜びを実感できる交わりの創造こそが不可欠となる。よって社会福祉実践の目標は、人間性の回復でありコミュニティの創造である点など、人間と人間の結びつきをいかに回復ないしは実現するかに関連しているのである。

4. 社会福祉実践における価値

ギャンブリル(Gambrill, E)⁽²³⁾は、社会福祉実践の価値を以下のように定義している。「価値とは個人、集団、社会が持つ社会原則、社会目標、社会基準を意味する⁽²⁴⁾」。この定義には、社会福祉の歴史、社会福祉の目的と視点が反映されているとギャンブリルは説明している。その証拠に、全米ソーシャルワーカー(National Association of Social Workers = NASW)は核となる社会福祉実践の価値として、第1にサービス(service)、第2に社会正義、第3に人間の尊

厳と価値、第4に人間関係の重要性、第5に誠実さ(integrity)、第6に能力(competence)を掲げている。

ギャンプリルは、さらに上記の項目について以下のように説明を加えている。⁽²⁵⁾第1のサービスに関しては、ニーズを持つ人々を援助し社会問題と取り組むことである。すなわち、ソーシャルワーカーは自己の利益を越えて、自身の持てる知識、価値、スキルを活用して、ニーズのある人々を援助し、社会問題と取り組む使命を帯びているとする。

第2の社会正義に関しては、社会的弱者および社会的に抑圧されている人々と共に社会変革を実現することである。よって、ソーシャルワーカーは貧困、差別、社会的不正義の問題を優先させて取り組むことを目指す。そのためには、ソーシャルワーカーは抑圧、文化的なエスニックの多様性について敏感であることが求められる。また、機会均等、必要とする情報・サービス・資源へのアクセス、自己決定における意味のある参加等の保障が必要としている。

第3の人間の尊厳と価値については、全ての人に対して、思い遣りと尊敬の態度をもって、個別性、個々人の文化とエスニックの多様性に配慮しなくてはならない。ソーシャルワーカーとしては、クライアントが社会的責任を負える自己決定ができるように励まし、クライアントが変化に向けて能力と機会を高め、自分のニーズと取り組めるようにする必要があると述べている。また、ソーシャルワーカーはクライアントと社会の双方に対して責任を負うと指摘する。また、ソーシャルワーカーは、専門職の価値、倫理原則、倫理基準に対して一貫性を持ち、社会的責任を負う形で、クライアントの利益と広範な社会の利益との間で生じる葛藤を解決すると述べている。

第4の人間関係の重要性に関しては、人間同士の関係が変化のための動力として重要であるとする。ソーシャルワーカーは人々を援助過程に協働者として参加させ、個人、家族、社会集団、組織、コミュニティの幸福を向上、回

復、維持、増進するように、人間関係を強化するとしている。

第5の誠実さに関しては、ソーシャルワーカーは絶えず、専門職の使命、価値、倫理原則、倫理基準を意識し、それらと矛盾することなく実践するとしている。さらにソーシャルワーカーは、所属する機関において倫理実践を促進させ、正直さと責任感をもって行動すべきであると述べている。

第6の能力に関しては、ソーシャルワーカーは専門知識と専門スキルを向上させ、それらを実践に応用するよう励み、かつ専門職の知識基盤に貢献できるよう志すべきだと述べている。

以上の倫理原則からも、価値には道徳的な要素が関係していることが伺える。つまり、意図や行動に関して、正しいことと誤っていることの識別を明確にすることが必要とされる。ソーシャルワーカーの倫理的な行動基準に関しては、通常の人間行動に関する善悪の判断に留まることなく、援助専門職として、社会正義と社会的な公正さの遵守、社会の平和と人間の幸福の実現という社会使命を強調しながら、クライアントの人権に配慮し、これを尊重しつつも、他方で、ソーシャルワーカーとクライアント双方における社会的責任の所在を確認する内容になっている。ソーシャルワーカーが自らの専門性の向上への努力を怠ることなく、専門知識・スキルの研鑽と専門職の発展に寄与すべきことを重要な使命としている点は、対人援助に関する専門職の価値実現のために欠くことができない重要な示唆といえる。

ところで、マーレイ(Mullay, B)は著書『構造的ソーシャルワーク(Structural Social Work)』⁽²⁶⁾のなかで、「価値とは人間にとって善とされるか望ましいとされるものについての信念、好み(選択)、仮定(前提)から構成される。(中略)価値は、世界の有り様に関する主張や説明ではなく、むしろ世界がいかにあるべきかに関するものである」⁽²⁷⁾と論じている。さらにマーレイは、価値はそれだけで成立するものではなく、思想シ

システムにおいて存在するとし、価値は他の価値と重要な関係性を持つやり方で組織化されるとも述べている。こうしたことから、価値は嶋田が論じたように、「欲しきもの」に基づくニード論ではなく、「望ましきもの」を追求するニード論を志向していると言えるのではないだろうか。⁽²⁸⁾換言すれば、単なる現状肯定論や現実妥協論ではなく、人間にとってよりよく、より望ましいといったような理想の実現と関わっていると思われる。

ところで、マーレイはソーシャルワークの本質的価値に関して、以下の2つの観念を取り上げている。その一つはヒューマニズムであり、もう一つは平等主義である。彼は、ヒューマニズムの意味するところを、人本主義というより人道主義ないしは博愛主義に拠るものとしている。さらに、彼は哲学辞典(Dictionary of Philosophy)による定義を示し、「ヒューマニズムとは、人間の尊厳と権利、人格としての価値、人間の幸福への配慮、人間の全体的な発達、社会生活にとって望ましい状況の創造の尊重に基づく見解システム⁽²⁹⁾」としている。この定義からもわかるように、ヒューマニズムの関心は社会を構成している人間であることが読み取れる。ギル(Gil)によれば、ヒューマニズムに基づく社会を築くためには、社会的平等、協力、集合的な志向を必要とし、ガルパー(Galper)が述べているように、全ての経済判断に関する考慮は、人間福祉に対する示唆に基づくべきであると指摘している。⁽³⁰⁾

マーレイは、ヒューマニズムに基づく社会条件として、ゴロフ(Goroff)の見解を以下のように紹介している。⁽³¹⁾第1に、各人は固有の尊厳と価値を有していると見なされ、実用的な物と見なしてはならないこと、第2に、人間関係は非搾取的であり、協力的で、平等的であること、第3に、人間労働によって生み出された資源は、他者のニーズを否定するのではなく、各人のニーズを充足するために物質とサービスを提供できるように配分するべきであること、第4に、各人は自分の全体的な人間としての可能性を発達

するために平等な機会を持つこと、としている。人間が単にモノ的な存在として扱われ、障害の種類や程度によっては、生産性や効率性の観点から存在価値を貶められる状況下にあつて、人間としての尊厳と価値を尊重する姿勢は重要である。機会均等と完全参加は福祉社会の実現にあたっては欠くことのできないものであるが、単に機会のみが均等に保障されるに留まることなく、能力の差による生産性の格差が生じた場合であっても、人間としての尊厳が軽んじられたり、価値までもが傷つけられたり損なわれたりしないよう、社会的に不利な立場におかれ差別されたり抑圧されている人々に対するセーフティネットを構築していくことが重要となる。

ところで、マーレイはヒューマニズムの限界あるいは弱点をも指摘している。⁽³²⁾彼によれば、ヒューマニズムは非歴史的であり、人間生活の社会的文脈に対する考慮がないという。換言すれば、福祉サービスを利用する人々の経済困難に対する関心を欠いていると批判をしている。さらにマーレイは、精神分析アプローチ、クライアント中心アプローチ、家族療法アプローチの場合は、人間の社会的文脈よりも洞察、自己実現、対人力動に関して焦点を当てていると指摘している。アメリカにおいて、ヒューマニズムが人間の心理社会的側面に焦点を置き、社会経済的側面に対する考慮に欠けるという時代状況は、アメリカの社会福祉において、臨床心理学を背景に心理療法を主体とした個人開業が臨床ソーシャルワークの形で、1970年代以降盛んになってきたことと軌を一にしているのである。

次に平等主義について論じることにする。マーレイは平等主義を別のことばに置き換えるとしたら、「社会的公正」であるとしている。⁽³³⁾その意図するところは、誰もが平等に固有の価値を持つがゆえに、平等に市民権、政治的・社会的・経済的権利や責任が与えられ、処遇される資格を有しているというものである。先ほどのギルによれば、人は誰でも自分に固有の人間として

の潜在能力を自由かつ十分に発揮し、他人による支配、統制、搾取から自由な生活を達成するように導くための権利と資源を有するべきという考えに基づくものである⁽³⁴⁾(Gil, 1976)。マーレイは、社会的公正さは、ヒューマニズムとは切れ離せない関係にあると論じる。何故なら、社会的公正さなしには、真の民主主義、自由、個性等の尊重は可能ではないと考えるからである。従って、社会的に不公正な国では、人間は固有の価値において異なるがゆえに、他人との競争において得られるパワー、統制、物質に関しては異なる権利が与えられるべきとする価値を前提にしていると述べている。

ところで、マーレイはヒューマニステックかつ平等な社会において鍵となる要素は、真の集産主義の精神であると指摘している⁽³⁵⁾。その精神とは、人間が互いに一緒に生活する際に、社会と呼ぶところの社会的実在を形成するという事実を真剣に受け止めることを意味すると論じている。彼によれば、集産主義は参加型意思決定を意味し、トップダウン方式のヒエラルキー的な決定を意味しないという。但し、集産的なニーズと資源に関して全体に影響を及ぼす領域での決定は、集産的な思想と行動に従うべきであるとしている。しかしながら、人間は、社会的、経済的、政治的な側面および雇用、社会資源の配分という様々な生活領域における決定の際に自己決定する権利を有するべきという考えを尊重しているのである。以上のことから、個人の福祉のみにとどまらず、公共の福祉の実現が重要視されているといえるのではないだろうか。個人の利益と集団(社会)の利益はいつも必ず合致するとは限らない。しかし、双方の利益が共に尊重されるような、平等で社会的公正さを保障する社会を実現することが目標となるのである。

マーレイは結論として、こうした基本的な価値を実現するためには、社会は、集産主義の原理、参加型意思決定、協力に従って調整され、社会的ニード、ヒエラルキー的かつエリート

による意思決定よりも、経済的利益にそった資源の配分や搾取的な実践に従わない社会システム構築が必要であると述べている⁽³⁶⁾。そのためにも社会秩序の形成が必要であり、ギルによる「社会福祉実践は政治的に中立ではありえないし、既成の社会制度と直面化し、これに対して挑戦するか、あるいはオープンかつ暗黙裡に順応するかである⁽³⁷⁾」と主張しているのである。以上のことは、ソーシャルワーカーは絶えず政治的なスタンスを問われていることを示唆している。もちろん、そのことはワーカー個人の政治イデオロギーにまで踏み込んで、明らかにする必要を意図するものではないと理解できる。

ところで、マーレイは社会福祉の第2次的な(道具的)価値と呼び、「この価値の示すところ⁽³⁸⁾に従って、ソーシャルワーカーは望ましい目的あるいは目標を達成するという第1の価値を実現するために、自分たちの専門職活動を遂行する際に、他者と交流するべきである⁽³⁹⁾」というピンカスとミネハンの指摘を引き合いに出している。さらに、マーレイは第2次的な価値として、尊厳、自己決定、受容の3要素を掲げている。しかしながら、マーレイはスタハム(Statham)の指摘として、これらの第2次的な価値は、社会的公正さよりも経済的な個人主義に基盤を置く社会においては無意味であると述べている⁽⁴⁰⁾。例えば、経済資源を持たない人々が社会的に不公正な社会において、自己決定するのは決して容易ではないという。つまり自己決定により選択したくても、社会的地位の低さや、持てる経済資源の乏しさ(不適切な住環境、失業状態等)ゆえに可能ではない場合も生じると論じている。また、ビーハル(Biehal)とセインブリ(Sainbury)らは、社会福祉の道具的な価値は、人間生活の文脈(パワーの違いにおける文脈)において見出されない限り、人間に対して尊敬や受容を示すだけでは不十分であると指摘している⁽⁴¹⁾。他方マーレイは、社会福祉が独自の価値(人道主義と平等主義)に立脚して、社会的な視点を確立させることが重要であると論じ

ている。

以上のことから、権力の所在はどこにあるのか、また非力とされる社会福祉のサービス利用者(クライアント)をエンパワメントし、資源の持たざる状況から持てる状況へとクライアントの環境を転換すべく、いかにソーシャルサポートを構築し活用するかが問われているのである。

5. 結びとして

社会福祉哲学を考察する際に、一つの視点として人権問題をいかに捉えるかが重要である。基本的人権と呼ばれる、人間としての尊厳、人間の自由な意思決定(自己決定)の尊重等が保障される社会形成が不可欠であることは言うまでもない。しかしながら人権保障は、生命の尊重をはじめ、いかなる社会的な差別・抑圧からも自由でかつ社会的公正や社会的平等が、単なる理念にとどまらず実現可能な社会においてこそ存在しうると考える。社会福祉の究極目的が、個人や集団のエゴイズムの自己実現ではなく、ましてや限られた範囲のコミュニティの利益獲得でもなく、一国の経済発展をも越えて、世界人類全体の社会開発、福祉と平和の実現に結びつく必要がある。むしろ全てがグローバル・スタンダードになることが最善とは必ずしも言えない。むしろ逆にローカルであってもそこにしかない、いわば掛け替えのない個性(アイデンティティ)が尊重され、同時に多様性が尊重された上での個性の尊重ではなくてはならない。本論を書き進めていくなか改めて気づいたことは、嶋田が強調したように、「まずまず世界的に、あくまでも日本的に⁽⁴²⁾」という主張である。日本が今後より一層、世界の福祉と平和の実現に貢献するためには、借り物ではない日本のオリジナリティ(固有の文化や歴史性)に基づく独自の社会福祉思想や哲学を再発見し、これらを新たに構築していくことが必要とされるのではあるまいか。

最後に、キャンベルのことばを引用して結びとする。「人生にもし意味があるとすれば、それ

は外から与えられたものではなく、ほんとうに生きている経験にある。古き我を立法と共に十字架につけて殺して内面的に再生すること、そして自然と調和してできるだけ楽しく生きること。そのためにも、お互いに思いやりの心を働かすこと⁽⁴³⁾……。」

【註】

- (1) 新村出編 『広辞苑』(第5版) 岩波書店、1998年
- (2) 守随・小泉・松村編 『旺文社国語辞典』 旺文社、1983年
- (3) 日本における障害児福祉の父とも呼ばれる。糸賀の福祉思想は重症心身障害児福祉の発展に大きな影響を与えた。
- (4) 留岡幸助は、日本の感化教育や家族小舎制による矯正教育の発展に寄与した。また、北海道家庭学校は遠軽町に広大な敷地を持ち、民間福祉事業を展開している。
- (5) 井上は遠藤周作と親交を深め、カトリック教神父の立場からキリスト教と日本文化の関係について論じている。
- (6) 井上洋治 『余白の旅一思索のあと』 日本キリスト教団出版局 1980年 P.53
- (7) アメリカにおける著名な神話学者であり、『神話の力』において、アメリカ建国の由来に言及し、世界国家にとり普遍的の真理となっている自由の意味を明らかにした。
- (8) アメリカにおける著名なジャーナリストであり、彼が試みたアメリカの英知である数多くの著名人とのインタビューは、アメリカ公共放送において反響を呼んだ。
- (9) ジョーゼフ・キャンベル、ビル・モイヤーズ 『神話の力』 飛田茂雄訳 早川書房 1992年 P.42
- (10) 同上書 P.23
- (11) 同上書 P.34
- (12) 井上洋治 前掲書 P.53
- (13) 同上書 P.225
- (14) 同上書 P.225

- (15) 同志社大学名誉教授。嶋田理論は社会体制論と人間行動科学論の統合である。
- (16) カトリックの修道女であり、岡山ノートルダム清心女子大学理事長を勤める。
- (17) 「神よ、変えられるものに対しては変える勇気を持ち、変えられぬものに対しては受け容れる心の静けさを保ち、この両者を見分ける英知を絶えず祈り求めよ」が彼の有名なことばである。
- (18) 渡辺和子 『愛をこめて生きる』 PHP 研究所 1989年 P.80
- (19) キリスト教における隣人愛の教えである。
- (20) 嶋田啓一郎 『社会福祉体系論—力動的統合理論への途』 ミネルヴァ書房 1980年, P.265
- (21) 同上書
- (22) 渡辺和子 前掲書 P.27
- (23) カリフォルニア大学バークレー校社会福祉大学院教授で、専門は臨床的・ソーシャルワークである。
- (24) Gambrill,E.(1997). Social Work Practice: A Critical Thinker's Guide, Oxford University Press, New York p.44
- (25) Ibid., pp.45—46
- (26) Mullaly,B.(1997). Structural Social Work. Oxford University Press, Ontario:Canada
- (27) Ibid., p.27
- (28) 嶋田啓一郎 前掲書 P.362
- (29) Mullaly,B. Ibid, p.27
- (30) Ibid., p.29
- (31) Ibid., p.28
- (32) Ibid., p.28
- (33) Ibid., p.28
- (34) Ibid., p.28
- (35) Ibid., p.29
- (36) Ibid., p.29
- (37) Ibid., p.29
- (38) Ibid., p.30
- (39) Ibid., p.30
- (40) Ibid., p.30
- (41) Ibid., p.30
- (42) 嶋田啓一郎 前掲書 P.363
- (43) ジョーゼフ・キャンベル, ビル・モイヤーズ, 前掲書 p.409

【参考・引用文献】

- 井上洋治 『余白の旅—思索のあと』日本キリスト教団出版局 1980年
- カールソン・R, シールド・B 『癒しのメッセージ』上野圭一監訳 1991年
- ジョーゼフ・キャンベル, ビル・モイヤーズ 『神話の力』 飛田茂雄訳 早川書房 1992年
- 嶋田啓一郎 『社会福祉体系論—力動的統合理論への途』 ミネルヴァ書房 1980年
- 渡辺和子 『愛をこめて生きる』 PHP 研究所 1989年
- Gambrill,E.(1997). Social Work Practice: A Critical Thinker's Guide, Oxford University Press, New York
- Mullaly,B.(1997). Structural Social Work. Oxford University Press, Ontario:Canada

[Abstract]

A Study on Social Work Philosophy

Yuzuru YOKOYAMA

This paper discusses one aspect of social work philosophy. The author examines social work values and their implications for social work practices. In addition, the author examines how social work philosophy relates to human rights and ethical issues. Two fundamental social work values, humanism and egalitarianism, are discussed in addressing the issues of the mission of social work as a profession. The author concludes that social work is a value-oriented profession that requires the consideration of human dignity and human rights. Therefore, social workers have to assess the social context of clients and make an intervention based on the code of ethics of their profession.